明治公園での逮捕(3 月 9 日)

たんぽぽ舎です。【TMM:No1805】
2013 年４月１３日(土)地震と原発事故情報-４つの情報をお知らせします
転送歓迎

明治公園での逮捕(3 月 9 日)
ー私の経験について「今後のため」報告します。脱原発運動の今後に少しでも役立てば・・・(連載その１）――――― 多辺田 政弘

(編集部)著者の了解を得て公開します。今後の不当弾圧に役立つので。
なお、長文なので６－７回に分けて掲載します。
(原文は縦書きなので和数字の日付けは算用数字に直して掲載)

一．逮捕までの経緯

2013 年３月９日に明治公園で行われた「３・９　さよなら原発集会」には、私は妻と一緒に参加しました。途中で弟とも待ち合わせて一緒に会場に向かいました。私たちは「脱原発」の主張にかねてから賛同しておりましたので、一昨年の３・１１フクシマ原発事故以来、「脱原発」の集会やデモには何度か参加したことがありました。

ところで、私は六十六歳（３・９当日）で三年前に心臓バイパス手術（糖尿病の合併症による狭心症・心筋梗塞のため）を受け、その際左足の静脈の一本を冠動脈バイパスに使ったため、左足側の腰痛や歩き辛さが「後遺症」として若干残りました。集会当日に家を出た時は、「今日のデモはどうしようかな」と迷っていました。しかし、集会で演壇に立たれた大江健三郎さんが、あのご高齢にも拘らずスニーカーを履いて今日はデモ・コースを最後まで歩かれる積りで来られた、との紹介が集会司会者からあったので、私も今日はデモ・コースを完歩しようと決めました。

少し予定時間より押していた集会が終わって、用意された二つのデモ・コースの出発口に隊列が並び始めました。私たちは（集会演壇に向かって左手出口から出発する）「一般市民グループ」の参加する「Ａコース」の隊列に加わることにしました。出発前にお手洗いを済ませようと考え、演壇左側の上段後方の広場に設けられていた仮設トイレで用を済ませてから、Ａコースの先頭の方を探しました。

Ａコースの隊列は、既に前のほうからびっしりと詰まって並んで、後ろの方には特定の団体の旗を立てた隊列が続いていました。私たち（妻と弟も一緒に）は市民グループのいくつかの旗の見えるＡコースの先頭集団を見つけ、出発直前だったので遅れまいと急いで

その隊列の横まで行き、隊列の横から（出発口に向かって左側の芝生の囲みを横切って）加わろうと小走りに駆けて行きました。

時間は３時半近くでしたが、まだデモは出発前でした。私の記憶では、前回（昨年だったと記憶していますが）の明治公園からのデモ出発時には、警察によるデモ規制は公園を出たところから始まったように思っていました。今回は会場（公園）出口の手前から警官が二メートル前後の間隔で並んでいました。

その間隔のある規制警官の列の間を急いで擦り抜けようとしてところ、規制警官が「ここはダメ」と手を広げてようとしたような感じでした。デモの隊列は目前でしたので、私はもう少しでデモ隊の列に駆けこめると思いました。目指す隊列まであと一、二メートルだったので、近寄った警官の間をすり抜けられるだろうと安直に考えました。しかし、背の高い若い警官のほうが、六十六歳の「足の衰えた」年寄りの私より、運動神経も体力も遥かに上でした。後で冷静に考えて見れば、周囲の状況判断を出来ずに直線的に行動を取ったことになります。

警官の制止を聞かずに、ただ目的に向かって走りぬけようとした「呆け掛かった老人」（私のことですが）を、大男の若い警官が条件反射的に一瞬にして年寄りの手を捕まえ捻り倒しながら「カクホ！」と叫んだように記憶しております。その瞬間、それを見ていたデモ隊の数人が私を助け出そうと駆けより私の右手や身体を引っ張り、一方、警官たちがバラバラッと駆け寄り、逃すまいと私の上に圧し掛かってきました。重量級の警官たちが何人も圧し掛かってきた訳ですから、「潰されるて死ぬんじゃないか」という恐怖が過ぎりました。地面に押しつぶされた私の頭の上でデモ隊の何人かと警官たちが私の身柄の奪い合いを、まるで「綱引き」のように始めたのです。間もなく左手に手錠が掛かり、その手錠は左手首を締め上げ初め、それが痛いのなんの、「どちらも、引っ張り合うのはもう止めてくれ」と息絶え絶えのなかで思いました。

手錠が掛かった瞬間に、私は取りあえず警察に行かなければならないだろう、そうすると少なくとも数日の留置・拘留は覚悟しなければならないだろうと観念しました。そう諦めて、覚悟した瞬間に、「どうせ捕まったなら一通り警察や留置場や検察庁とやらをこの目で見てやろう」という好奇心が不思議に湧いて来ました。

この逮捕の瞬間に就いて、後に、四谷署での取調べのときと東京地検での検事取り調べの中で分ったことですが、私を捕まえた若い警官は「被疑者が手を前に伸ばして突き倒したので公務執行妨害で逮捕した」と報告していたようなのです。私には「警官を突き飛ばそうという考え」も「突き飛ばしたという記憶」も全くありませんでした。「手を前に伸ばして」というのは、二人の警官の間を擦り抜けてデモ隊のほうに走り寄ろうとした状況から、そういう形になっていたかもしれない、とは思いましたが、それは警官に手を上げたという意味では全くなかったことは間違いありません。私の脳裏の残像をもとにその瞬間を再現してみれば、若い警官が制止を聴かずに自分の身体の横にぶつかってきた男に、カッとなって反射的に、腕を捕まえ捻り倒した、ということだったのです。ただそれだけだ

ったのです。多分、若い警官がもう少し冷静だったら、飛び込んできた「ボケ老人」を制止して後方に回ってデモに加わるように促せばよかっただっけの話ではなかったかと、後の取り調べの時に思いました。また、現場の警察官が冷静さを欠いていたのは、初めから警察側に「とにかく抑え込め」という空気（あるいは指示）があったからではないでしょうか。

そういう状況を客観的に振り返ってみれば、確かに私の迂闊さ（不注意）もあったのですが、「（不必要な場所での）過剰規制」と「（若い警官の感情的）過剰な逮捕」つまり「逮捕権の乱用」が引き起こした偶発的事件だった、と見るのが最も妥当な見方なのではないか、と思います。またもう一歩踏み込んで、あの時のデモ出発前の公園出口手前の規制は「デモへの参加妨害」という警察側の「越権行為」だったのではないか、と考えることもできるでしょう。しかし、私はそのことを取り調べの中では敢えて争うことはしませんでした。（但し、もし起訴になれば、デモ出発前の出口での「不要な過剰警備」は、法廷での「重要な争点」の一つになるだろうとは考えましたが）

さて、話は逮捕時に戻りますが、一瞬にして起こったその揉み合いの風景の中で、はっきり憶えていることが一つあります。女性の弁護士さんが「私は弁護士の何某です」と叫びながらもみ合いの塊に近づいてきてくれたことです。それは私の中に何やら「希望（望みの綱）」のようなものとして頭の隅に響きました。

後に（釈放後に）、その渦中にいた私の妻や弟から聞いて分かったことですが、彼女は横浜の岡部法律事務所の岡部玲子弁護士でした。妻の話では、私がもみくちゃにされている時、デモの人に向かって岡部先生は「離れなさい！」と言ってくれたそうです。メチャ無茶な押し合いへしあいが止んで、警官にやっと助け起こされたのは、多分その直後だったのではないかと私の記憶の中で符号しました。因みに、これも後でわかったことですが、その現場に散乱して残っていた物（サングラスや本や帽子など）を拾って預かってくれたのも岡部弁護士でした。釈放後、その回収物の中に、鞄に入れておいた私の二冊の本もあったことを問い合わせて下さり、送付して下さったのも岡部弁護士でした。

また、これも釈放後に知ったことですが、この混乱の中で傍にいた妻（六十八歳）が、取り押さえに掛かっていた警官たちに「この人は体調が悪いので止めて下さい」と必死で叫んで助けを求めていたら、その周りにいた警官（特定はできないが）にキツイ肘鉄を胸部に食らったそうです。まだその打たれたところは痛むようです。とにかく年寄りにも見境なく暴力をふるったようです。ーー「人間に配慮を欠いた」社会と政治を見事に反映しているように思えてなりません。

たんぽぽ舎です。【TMM:No1806】
2013年４月１５日(月)地震と原発事故情報－５つの情報をお知らせします

転送歓迎

明治公園での逮捕（３月９日）
－私の経験について「今後のため」報告します
脱原発運動の今後に少しでも役立てば・・（連載その２）―　多辺田 政弘

二、四谷警察署での取り調べ

四谷警察署に警察の車で護送されてからの流れは、ほぼマニュアル通りだったと思われますので、細かいことは省きます。とにかく、手錠と腰縄に拘束され、「人間扱い」はしないというシステムで貫かれていました。

まず、所内の部屋の一部を仕切っただけの粗末な取調室に入れられ、持ち物を押収され、身体検査を受けた。それから、取り調べ担当官＝警部補（自ら「奥迫＝オクサコ」と名乗っていました）がやって来て、マニュアルの流れに沿って、まず、弁護士を付ける権利のあることを述べた。しかし、初めから捕まることを想定して弁護士を決めてデモに参加する人はそうおりません。ふと頭に浮かんだのは逮捕時の混乱の中に駆けつけてくれた女性の弁護士さんの顔だったのですが、名前も所属も分らないので、「まだ決まっていない」と記録された。

それから、「自分に不利になることや話したくないことはその旨を言えば良い」と、これもマニュアル通りに伝えられた。私は、意図的に「公務執行妨害」をした訳ではなかったので、反抗的な態度を取らなければ不起訴になることは間違いないだろうと思っていましたので、「完黙」などという方法は取らずに、（関連して他人に迷惑を掛るようにならないことは慎重に心掛けましたが）、自分のことについての質問には素直に簡潔に応えました。－とにかく、このような過剰な逮捕は絶対「不起訴」にしなければ、と心に決めていましたから。

取り調べは、身上（経歴）や「逮捕時の状況と自分の弁明」などが時系列的に淡々と尋問されました。取り調べをしながら調書をパソコン（ワープロ）で作成し、途中何度も打ち上がった部分をプリントアウトして被疑者（私）に記載事項を見せて確認する、という作業を繰り返しました。始まったのは午後４時過ぎからで、途中、《病院への往復（診察と常薬を取りに）＝後述》、と《夕食》、を挟んで、夜の十一時過ぎまで続けられた。この間、トイレと水を何度も要求しました。これには素直に応じてくれました。因みに、この取り調べ官は、四十代後半ぐらいで、私の受けた印象では、普通に気さくな感じで、「意地の悪い人」（悪意のある人）には見えなかった。

取り調べを始める前に、病気や薬のことを聞かれた。三年前の心臓のバイパスの手術後から投与さしているワーファリン（毎朝食事）と、二十年近く続けている糖尿病のインシュリン注射（朝・夕二回）があることを告げた。共に東京女子医大に通院していること

を告げると、取り調べを中断して、夕食前に署の車で東京女子医大病院の緊急外来の病棟に連れて行き、簡単な診察と薬を貰うという措置が取られました。事前に警察のほうから電話で予約をしていたらしく、スムーズに手続きは進んだ。診察は時間外だったので、別病棟（「緊急外来」）から入り、若い宿直医が対応していた。土曜日の緊急対応だったせいで、薬は二日分しか処方されなかった。もし、月曜日に地検から起訴が申し渡された場合には、拘留が長引くので、もう一度月曜日に病院に行く必要があった。この間の往復、病院内での行動も含めて、公衆の面前でも、すべて手錠・腰紐を付けられたままであった。しかし、手荒い扱いと言う訳でもなかった。

「取り調べ」に対して、私は三つの簡単な心得を自分なりに作りました。そしてそれを守りました。一つは、事実の記録を曲げさせないこと。二つ目は、論争をしないこと。例えば、「不当逮捕」であるなどの価値判断（主張）の分かれる言葉を使わないこと。三つ目は、自分のドジも率直に認めること。－逮捕されてしまった以上は、「不起訴」が目標（焦点）であると考えたからであります。なぜなら、《この程度では「公務執行妨害罪」は成立しない》という結果をちゃんと残すことこそが、この時点での「私の闘い」であると考えたからです。

取り調べ官やまわりの世話係の警官に無駄に突っかかったりせず、紳士的に対応するようにした。相手も感情を持った人間であるのだから、不快感は判断を左右させることもあるだろうから。調書の内容の確認は納得のいくものにする。自分が述べた部分の記述のところで納得のいかない表現がある時には、「そうは言わなかったと思います」と率直に納得できる形に訂正してもらう。また、「そこまで細かく聞く必要はありますか」と微細な質問には疑問を投げかけ簡潔にしてもらう。若いエネルギーの有り余っているときと違って、「年寄りの半病人」（私のことです）には、「完全黙秘」をしたり、無駄なエネルギーを浪費して「論争」を楽しむ余裕は残念ながら残って無かったのです。それに、自分で蒔いた種は自分で刈り取るほかはない。隔離された警察署の中では「たった一人の反乱」なのだから。（続く）

たんぽぽ舎です。【TMM:No1808】
2013年４月１６日(火)地震と原発事故情報－５つの情報をお知らせします

転送歓迎

明治公園での逮捕（３月９日）
－私の経験について「今後のため」報告します
脱原発運動の今後に少しでも役立てば・・・（連載その３）―　多辺田 政弘

ところで、取り調べ中に大変気になったことが一つありました。それは、私が**「携帯」を持っていないか、**警察（公安）の人間が、何度も取調室に入ってきては執拗に所持品検査と身体検査をして**携帯を探しまわっていたことです**。それは「血眼」とも言える

異常な執拗さでした。私はこれまで一度も携帯を持ったことのない（「持たない主義」の）今どき珍しい時代遅れの人間ですから、警察も不思議に思ったのかもしれません。もし私が携帯を持っていたら押収して、そのメール記録から簡単に芋ずる式に人間関係と情報のネットワークそして通信内容まで解析して、手に入れようとした公安の魂胆が、ハッキリと見えました。そして、背筋がぞっとしました。それは「捜査」に名を借りた不当な「プライバシーの侵害」である。公安はメール記録のコピーを一瞬に、しかも「証拠を残さず」行えるだろうと推測できました。携帯電話はもし押収されたら、警察・公安にそのような使われ方をされる危険性があることを、デモ参加者は予め認識し注意しておく必要があるように思いました。携帯のような便利な情報・通信機器は「両刃の刃」であることをゆめゆめお忘れなきように願いたいと思いました。

こうして、四谷署での取り調べが終わったのは多分午後十一時過ぎ頃だったのではないでしょうか。その後、地下室にある撮影機器などの並ぶ部屋に連れていかれて、正面・横の上半身写真やすべての指の指紋をやたらと撮られました。これをどう利用するのだろうかと不安に思いました。ーーそれらすべてが済んでから真夜中に拘置所のある湾岸署に移送されました。四谷署には留置場がないかららしい。（何年か前まではあったらしいのですが、手狭になったため別の用途の空間に変えてしまったらしい）。

四谷署での取り調べが予想したよりスムーズにいったように感じたのは、私の「三つの対応心得」が功を奏したのかなと思ったのは、独り善がりだったようでした。少なくともそのせいだけでは無かったということは、釈放後に家族や友人からの報告で分りました。逮捕時の映像がユーチューブで流れ、集会関係者や弁護士の方々がいろいろ奔走され、四谷署に沢山の抗議の電話や釈放要請が殺到したらしいのです。後で思い出してみると、その「外部からの圧力」が四谷署の慎重な取り扱い態度に現われていたことは間違いないように思えました。

たんぽぽ舎です。【TMM:No1810】
2013年４月１８日(木)地震と原発事故情報－４つの情報をお知らせします

転送歓迎

明治公園での逮捕（３月９日）
ー私の経験について「今後のため」報告します
脱原発運動の今後に少しでも役立てば・・・（連載その４）
湾岸警察署（留置場）にて
小竹弁護士の明るさと元気さに大いなる安堵感に包まれました

―　多辺田 政弘

三．湾岸警察署（留置場）にて

夜景の見える湾岸道路を飛ばして留置場のある湾岸署に四谷署の車で着いたのは、日付が変わった三月十日の夜中でした。入ってすぐの手続きの時に書類にいくつかの母印を押させられたが、その書類の日付が既に十日になっていた。警務官から「入所心得」を渡され読まされて、身体検査をされ、用意されたジャージに着替え、一〇畳くらいの一人部屋に通され、やっと眠りに就いたのは午前二時頃だったのではないだろうか。「入所心得」には起床時間が午前六時と書いてあった。留置場内では名前では呼ばれることはなく、私は「二十五番」という番号で呼ばれることになった。

眠りに落ちてすぐに監視から「二十五番！弁護士が接見に来たので起きなさい」と起こされて、接見室に通された時は、二時をかなり過ぎていたようだった。私は「弁護士さんが来てくれた」というだけで、心が軽くなりました。

接見室の硝子張りの仕切りに開いた小さな窓を通して、初めて外部の人に会うことができました。「弁護士の小竹です」と、想像もしなかった明るい若い女性の声が聞こえてきました。こんな時間なのに、明るく元気に笑って迎えて下さった先生のお顔を見て、何か大丈夫だという大いなる安堵感に包まれました。先生は「もう一人の同じ法律事務所の同僚の若い弁護士さんも一緒に待っていたのですが、電車も無くなるので先に帰ってもらいました。彼女も、とても興味を持って会いたがっていました」と話し始められました。

先生は「私も学生のころ早慶戦の天覧試合に反対して、ビラを撒いて逮捕されたことがあるので共感を持ちました」と笑って仰って下さり、一瞬にして私の心を和ませてくれました。ー後に私が釈放されてから先生の若き日のご自分の事件についての詳細な記録をお送り頂き、実に楽しく読ませて頂きました。それは、観察力とユーモアの溢れた奥行きのある文章でした。

ー先生は「こういう経験はめったに味合えるものではないので、好い経験だと思って頂くのも好いですね」とユーモアを込めて言われたのにはまったく同感でした。私も、既に手錠を掛けられた時点で、頭をそのように「切り替え」ていましたので。さすが根性のできた体験者（先輩）だと秘か頼もしく感じました。その時、先生には私の逮捕時の経過を簡単に説明させて頂きました。先生は「それくらいなら不起訴になると思いますから、大丈夫ですよ。月曜日に東京地検に行くことになると思います」と先生の見通しを話して下さり、ほっとしました。

「何か要望はありますか」と先生が尋ねて下さったので、「家の者が心配していると思いますので、元気だったとご連絡頂けますか」とお願いをしたら、「奥さまは四谷署に来ていらしたのですが、留置先がなかなか決まらず、大分待たされた後、お帰りになりました」と告げられ安心しました。そして、この次に妻が接見に来る時に持ってきて欲しい物を伝えて頂けるようにお願いして、お別れしました。

たんぽぽ舎です。【TMM:No1811】
2013年４月１９日(金) 地震と原発事故情報-5つの情報をお知らせします

転送歓迎

明治公園での逮捕(3月9日)、私の経験について、今後のために報告します。
脱原発運動の今後に少しでも役立てば・・・(連載その５)

――(多辺田 政弘)

(三. 湾岸警察署(留置場)にて　＜つづき＞)

単独房から共同房へ・・・拘束された者同士の仲間意識

翌朝(十日)に、湾岸所内の単独房から共同房に移されました。房内でのみ手錠を外され身体を楽にすることが出来ました。私の房は三人部屋でした。同室の一人は二十代の半ばのイケメン青年、もう一人は四十代半ばの坊主頭の腹の据わった感じの壮年で、六十代半ばの私と丁度ほぼ二十歳間隔の開きがある面白い組み合わせでした。二人がどうしてここに入っているのかは二人の交わす会話の端々から大雑把に察しはついたのですが、その憶測はここでは省略させて頂きます。

二人とも、ユーモアがあり率直でとても感じのいい人たちでした。同室になって不愉快なことはまったくありませんでした。私は房内で一番後輩だったにも拘わらず、こちらが恐縮するくらい「長幼の序」を持って接してくれて、房内の日課を教えてくれました。食時の世話をやいてくれたり、室内の掃除(床のカーペットの水洗いやトイレ掃除)も負担を軽くしてくれたり、同室の隣人は優しい心配りをしてくれました。

二人は、朝起きると布団をたたみ、上半身を裸になり、通路側の鉄格子の下に足首を引っ掛けて物凄い速さで上半身を起こす腹筋運動を始め、汗びっしょりになるまで続ける。これは持久戦に備えて体力を鍛えておく為だそうだ。二人とも筋肉質の良い身体をしていました。それが毎日の日課のようでした。

私は丸坊主の精悍な面構えの四〇代の男を「親分」と呼んだ。若い二〇代の青年は六法全書を借り出しては取り調べ対策を勉強していたので「六法君」と綽名を付けた。二人は同じ部屋になって一週間ぐらいのようだが、実に仲が良く洒落た会話をしていた。

そう言えば、私が部屋に入った時、親分は私に向かって「刺した？」と刃物で衝く真似をして笑った。私も笑った。二人はよく本を読み、時々「今何が食べたいか」の話題で盛り上がっていた。私は二人から「博士」と呼ばれた。朝に移動本棚から読みたい本を借りられるのだが、私が小川洋子の『博士が愛した数式』を借り出して読んでいたからである。二人は感心なことに日記を毎日書いていて、「親分」は日記を広げて「今日は入ってきた博士は何者だろう」と声を上げながら書く振りをして私を見て笑った。

留置場の壁の中の空気は新鮮で温かく、心なごむものがありました。それは、「拘束された者」同士の一種の仲間意識もあるのかもしれません。後に小竹先生からお送り頂いた『留置場日記』(先生ご自身の留置場体験記)を読ませて頂くと、そこに拘留者同士の共通

の感受性が働いていたことが書かれていて大変共感しました。小竹先生が「新しい経験があるわよ」と言われた意味の一つがこれかな、と思いました。

留置場内で体験した面白いエピソードはまだいくつかありますが、その話はまた別な機会にしたいと思います。(次号につづく)

（次号：四．東京地検での取り調べ・・・・）

たんぽぽ舎です。【TMM:No1812】

2013年４月２０日(土)地震と原発事故情報-４つの情報をお知らせします

転送歓迎

明治公園での逮捕(3月9日)、
私の経験について、今後のために報告します。
脱原発運動の今後に少しでも役立てば・・・(連載その６)
――（多辺田 政弘）

四．東京地検での取り調べ――「不起訴・釈放」へ

翌三月十一日の朝は東京地検へ送致され、取り調べがあった。留置場の同室の二人の話では、地検に送致される時は、護送車に被疑者が一緒に集団で乗せられて護送られ、地検の控えの大部屋に一緒に入れられ「木の固いベンチ」に並べさせられ、検事に呼ばれるまでじっと黙って待ち、自分が取り調べが終わっても、最後の一人が終わるまで控えの部屋で待ち、夕方五時ごろに、また集団で護送される、ということだった。

「この待ち時間が長く、かなりキツイ」と話していた。ただし、稀に「単独」送致というのがあって、それは地検の取り調べ時間に合わせて送迎護送されるので、あれは待ち時間が少なくて楽だと話していた。

九時ごろ、地検へ護送される者の番号が次々に呼ばれたが、私は呼ばれなかった。聞くと、何やら「単独送致」ということで暫く待つように言われた。同室の「六法君」が「いいなあ、早く帰れますよ」と羨ましがった。「親分」と「六法君」は今日は地検に呼ばれる日ではない。

九時半ごろに、私は迎えに来た四谷署の三人の警察官に付き添われて小さな護送車で湾岸署を出て東京地検に護送された。天気が良く途中大きな観覧車が見えた。

東京地検の内部（地下？）は、白いコンクリートの部屋が四角い廊下の左右にびっしりと詰まった「巨大な（四角い）蜂の巣」を思わせる監獄のようだった。入口の所で、手錠・腰紐を掛けられ数珠繋ぎにされた十人近くの集団が並ばされて点呼を取られていた。なんとも家畜のような扱いだった。

「単独送致」の部屋は、その「巨大な四角い蜂の巣」のなかの一つの「小さな巣穴」

のようなものだった。ガラス張りの部屋で廊下を挟んで左右に並んでいた。到着したのは十時過ぎ頃だった。部屋の中は個室列車（コンパートメント）のように木の長椅子が向い合って並び、その奥に上半分ガラス張りのトイレと手洗いになっていた。それは留置場の部屋とほぼ同じ構造になっていた。四谷署員の一人が私の横に、もう一人が前に、そしてもう一人が廊下の椅子に座って、私が検事に呼び出されるのを待った。「ここで待たされるのが長いんだ」と私の横に座った四谷署員がぼそりと言って、じっと目をつぶって座っていた。

そう言われてみれば、警察では何事も「待たせる」ということが平気になっていて、恐ろしく時間に鈍感過ぎる、と思った。接見の弁護士さんや家族には情報を与えず延々と何時間でも平気で待たせる。あんなにも人を待たせることに鈍感になっているのは、警察官自身が警察内部で何も考えずにひたすら上からの指令を待つことに日常的に馴らされているからなのだろう、とその時思った。そう言えば、日本の官僚制システムとは、この「人間（他人）への鈍感さ」（つまり「人権感覚の無さ」＝「思いやりのなさ」）によって上から下まで習慣化されている「鈍感なシステマチックな世界」なのだということに改めて思い至った。　（つづく）

たんぽぽ舎です。【TMM:No1815】
2013年４月２４日(水)地震と原発事故情報－３つの情報をお知らせします

転送歓迎

明治公園での逮捕(3月9日)、
私の経験について、今後のために報告します。
脱原発運動の今後に少しでも役立てば

ゆったりした検事の部屋で尋問を受ける
「竜雷太」に似た検事＝山崎某と事務官―　多辺田 政弘

検事に呼び出された時刻は、付き添いの署員が「お昼を取らせるべきか」と迷い始めた十二時ちょっと前だった。通された検事の部屋はゆったりとした絨毯敷きの部屋で、黒い背広を着た検事と事務官がそれぞれ大きめの机に向かって座っていた。検事の名は確か山崎某と言った。中年の何かおっとりとした大柄な人物で、その顔と姿を見た途端、どこか刑事ドラマで何度も見たような感じの男だな、思った。すぐに名前を思い出せなかったが、役者の顔ははっきり浮かんだ。後で男優の名前を思い出した。刑事ドラマによく出る「竜雷太」である。あまりに役にぴったりな役者顔だったので危うく吹き出しそうになった。検事調取の間、手錠は外されが、腰紐は座らされた椅子に結びつけられていた。

検事は警察から送られてきた調書に目を通しながらゆっくりと確認するように尋問を始めた。一つだけ事実に反すると思われることが記載されていた。

それは、逮捕時の警察官の言い分（逮捕状況）で「被疑者が両手を前にして突き飛ばした」という個所であった。これは四谷署での取り調べの時に、取り調べの刑事から示された「逮捕警官からの報告」の内容と同じだった。その時と同じように、私は、「突き飛ばしたのではなく、デモ隊のほうに急いで加わろうとして制止に近寄って来た警官にぶつかってしまったのです。その時、私は倒れ取り押さえられたので、私の記憶では警官が倒れたのは見ていません」というような趣旨を述べた。検事は、多分警察から送られた調書のなかにそのこと（私の弁明）も書いてあったのを見ていたようで、私の言い分も書き加えられた。検事調書に書かれたことは、その都度読み上げられて確認しながら進んだ。

最後に私が警察の取り調べの時にも最後に付け加えた「馬鹿なことをしたと反省しています」という一言もちゃんと書き加えられていた。私の言った意味は「余計なドジを踏んで時間をロスし、皆を心配させたのは自分でも馬鹿なことだった」という意味だったが、そういう率直な反省をしたのも嘘ではない。もちろんそれは、警官の行為が正当だったと認めたという意味では全くない。逮捕した若い警官の行動の妥当性は敢えて争わなかったのである。検事がワープロ（パソコン）で打ち上げた調書の文章を読み上げ、私にこれでよいかの確認を取り、読みあげられた「簡潔な記載」は間違ってはいなかったので同意文書に指紋押捺をした。

最後に、検事は、さり気なく「手続きとしては、形式的にですが裁判所と協議の上、警察などへの報告・了承などが必要なので暫く待つように。また、釈放後、もしかしたら警察や裁判から関連して呼び出しがあるかもしれませんが、その時は出頭できますね」といった趣旨のことを述べた。私は、その意味がよくは分らない部分も正直あったのですが、取りあえず「分りました」と答えた。「竜雷太」検事が人を貶めるような人には見えなかったからである。

検事の聴取は十五分から二十分ほどで、十二時十分頃には終わったと思う。前の控室に戻り、四谷署が用意した昼飯を取った。昼飯は定番の「食パン」三切れ、パック詰めの「ジャムとマーガリン」、それに紙パック「ジュース」であった。待ち時間の間、三人の四谷署員のうち私の横の警官を除く二人が交代でどこかに食事に行った。その間、残りの四谷署員が、帰りの段取りを四谷署と取っていた。

検事判断（起訴・不起訴）の結果を待ってから湾岸署に護送するような段取りになったようだった。何度かもどかしそうに地検の事務局に「結果が出たかどうか」連絡を取り合っていた。（つづく）

たんぽぽ舎です。【TMM:No1817】
2013年４月２５日(木)地震と原発事故情報－５つの情報をお知らせします

転送歓迎

明治公園での逮捕(3月9日)、
私の経験について、今後のために報告します。
脱原発運動の今後に少しでも役立てば(連載その８)

不起訴・釈放になった－妻と娘と友人の迎え

多辺田 政弘（元沖縄国際大学教授、元専修大学教授・環境経済学）

地検の裁定が護送係の四谷署員に伝えられたのは二時を回っていたように思う。一人の署員が、取り調べ控室の中に居る私に声を潜めて「不起訴・釈放です」と教えてくれた。予想通りとは言え、ソレを聞いて心底ホッとしました。

湾岸署に護送される帰りの車の中で、同行の四谷署員が「検事の指示は、釈放は身受け引き取り人（家族か弁護士）が迎えに来てからという条件が付いていた」と話していた。

地検から湾岸署に着いたのは三時過ぎごろだったと思う。四谷署員から湾岸署員に身柄を渡され、取りあえずもう一度前の留置場の部屋に戻された。しかし、その際にもう手錠を嵌められることはなかった。部屋では「親分」がゴロリと寝転んで昼寝をしていた。もう一人の「六法君」は警察の取り調べ室に呼ばれて居なかった。私も「親分」の昼寝を妨げないように部屋の片隅でごろ寝をした。何故かこの部屋が急に懐かしく遠いものに見えてきた。あとから、「六法君」が「取り調べ中、ずっと黙って刑事と向かい合っていたよ」と言いながら取り調べ室から戻ってきた。釈放になったことを言うと「よかったですね」と喜んでくれた。

身受け引き取り人として「私の妻」を指定したが、家とは連絡が取れないと何度か湾岸署員の留置係が言いに来た後で、別室に呼ばれた。「他にすぐに連絡を付けられる者はいないか」と言われたが、「妻がこちらに向かっているはずですから。弁護人の小竹先生に連絡すれば妻に連絡が付いているかどうかも分かるはずです」と言って、妻との連絡を再度頼んだ。湾岸署員が身受け人との連絡にかなり焦っている様子が読みとれたが、何でも待たせる警察官が何故そんなに慌てているのか、よく分からなかった。また三人部屋に戻された。

やっと「身元引受人が来たから」と房から出されたのは四時頃だったと思う。私は、で一宿一飯の恩義を受けた二人の同居人に挨拶をして出た。

別室で留置場に預けた財布その他のリストと照合しながら身の回り品を確認し返却された。それから、湾岸署員から、四谷署の奥迫刑事と二人の署員が三時ごろから待っていたと知らされ、押収していたジャンパーなどを返却に入ってきた。なるほど、湾岸署員が身受け引き取り人との連絡を焦っていたのはそういう事情だったのかと分った。悪びれた様子もなく、しかしいつになく神妙な顔で三人は現われて軽く会釈した。その後から、妻

と娘と友人の三人が入ってきた。私は、ニコニコ笑ってご苦労様と言ってちょっぴり雑談をした。（つづく）

たんぽぽ舎です。【TMM:No1818】
2013年４月２６日(金) 地震と原発事故情報-4つの情報をお知らせします

転送歓迎

～～～不起訴・釈放になってうれしかった。その陰には多くの皆さんの支援があった。これからも私にできる「脱原発の道」を歩く。～～～

釈放されて、湾岸署の建物を出る所まで四谷署の三人が見送に出てきた。私は「お世話様になりました」という言葉が咄嗟に口から出た。自分でも可笑しかった。

モノレール「ゆりかもめ」の「船の科学館」駅まで迎えに来てくれた三人と歩きながらお喋りをした。友人は（たぶんユーモアも込めて）「心配して損した」と言って憮然として黙って歩いた。娘などは「警察に先生なんて持ち上げられていい気になっていたんじゃないの」と怒っていた。三人は私が「寒い留置場の中で辛い夜を過ごしたんじゃないか。辛い取り調べを受けたんじゃないか」と心配していたのに、当の本人があっけらかんと笑いながら四谷署の署員に「お世話になりました」なんてお辞儀までしていたのが不思議でしょうがなかったようなのである。

なるほど、皆が憮然としていた気持ちは痛いほどよくわかった。しかし、私はやはり秘かにほくそ笑んでいたのである。私は手錠を掛けられた時から、「不起訴・釈放に持ち込むことが私の闘いだ」と決めていたからである。「こんな些細なことで公務執行妨害罪なんて成立させてたまるか。不起訴にすることが、逮捕の正当性がなかったということを公に認めさせることになるのだから。不起訴は警察の負けということになる」と。だから、四谷署の人たちも敗北したことを理解して神妙だったのだろう。…しかし、正直言えば、私がニコニコしていたのは、そういうカッコイイ図式的な見方からだけではなかった。やっぱり解放されて嬉しかったのと、一日でも顔を付き合わせて取調室で向かい合った四谷署の人の良さそうな刑事を単に「権力側の手先」とだけしか見れなかった訳ではなかったからでもあります。やっぱりどうしようもなく人間が見えてきてしまうのです。ーーそんな私の割り切れない（「煮え切れない」と言うべきか）「心の内」は、その時心配しながら迎えに来てくれた三人にはすぐには言えませんでした。

それから、新橋に出て駅の近くで四人でラーメンを食べながら、私には想像だにしなかったことが外で起こっていたことを知らされました。ユーチューブで逮捕劇の画像が流され、四谷署と湾岸署に抗議の電話や釈放要請が沢山送られたという話。弁護士さん達が東奔西走して下さった話。いやはや、ビックリする話ばかりだった。この間、私の娘や弟も連絡の中継役になって大変だったことなどを矢継ぎ早に聞かされてビックリ仰天した。

とにかく、集会の主宰者たちが心配しているから、ちょうど今夜開かれているシンポジウムに行って、主催者側に経過を説明する義務がある、と娘たちに強く言われ、私も納得し、大井町の駅の傍で開かれていたシンポジウム会場に向かった。そこで、「３・９さよなら原発集会・デモ」の実行委員の人々に会い、経過説明とお礼を述べて、帰宅させて頂いた。私は逮捕後、壁の中では自分一人で「たった一人の反乱」をしていると思っていましたが、そうではなかったのである。ご支援いただいた方々に心より感謝申し上げます。ここでは省略させて頂きますが、「不起訴」になったのは、多くの皆さんからの支援の賜物であったということは、振り返ってみれば、何となく「思い当たる」場面（四谷署、湾岸署や東京地検での対応）がいくつもありました。やっぱり皆さんの声が四谷署にも湾岸所にも東京地検にも届いていたのだ、と確信しました。本当に有難うございました。

私はこれに懲りることなく、これからも私にできる「脱原発への道」とは何かを考え、この経験の意味を深め、ささやかでも私なりに出来ることを模索し続けることによって、皆さんへのお礼とさせて頂きたいと思っています。

（二〇一三年三月二三日　多辺田政弘）＜完＞